『ニーベルンゲンの歌』写本mと『不死身のザイフリート』

石 川 栄 作

Die Handschrift m des Nibelungenlieds und der Hürnen Seyfrid

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Die Handschrift m des Nibelungenlieds ist ein 1853 im großherzoglichen Staatsarchiv zu Darmstadt aufgefundenes Pergamentblatt,das als Umschlag eines aus Mainzer Klosterarchiv stammenden Ackerbuchs von 1540 diente. Das sogenannte Darmstädter Bruchstück, das wahrscheinlich zu Anfang des 15. Jahrhunderts am Mittelrhein oder in mittelrheinischer Gegend geschrieben wurde, enthält ein Verzeichnis von 28 Aventiuren einer erweiterten Nibelungenhandschrift. In diesen Aventiuren aber zeigen sich einige Abweichungen von den bisher bekannten Nibelungenüberlieferungen: die Erzählungen wie Entführung der Jungfrau Kriemilde durch einen wilden Drachen und danach ihre Erlösung aus dem Drachen durch Siferit. Diese Abweichungen im Nibelungenlied m decken sich erheblich genau mit dem Hürnen Seyfrid, der nur in Drucken überliefert ist: der älteste Druck erscheint gegen 1530 und der letzte 1642. Dieses Werk wird wegen einiger Widersprüche gewöhnlich in drei Erzählpartien geteilt: Anfangsteil(1-15), Hauptteil(16-172) und Schlußteil (173-179). Gerade mit dem Hauptteil können die Erweiterungen der Nibelungenhandschrift m wiedergegeben werden. Durch das Aventiurenverzeichnis m ist jedenfalls erwiesen, daß es spätestens vor 15. Jahrhundert eine Dichtung gegeben hat, die den Stoff für den Hauptteil des Hürnen Seyfrid bildet. Die Abweichungen wie Raub der Jungfrau durch einen Drachen und ihre Befreiung durch den Ritter, die nie in den nordischen Nibelungenüberlieferungen zu finden sind, werden später durch Hans Sachs im 16. Jahrhundert, Sammler des Volksbuchs vom gehörnten Siegfried im 17. und 18. Jahrhundert, und auch Gustav Schwab im 19. Jahrhundert überliefert. In solchen Nibelungenüberlieferungen nehmen die Handschrift m des Nibelungenlieds und der Hürnen Seyfrid eine Sonderstellung ein.

はじめに

韻文『不死身のザイフリート』(Der Hürnen Seyfrid)は、写本で伝承された『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied)などとは異なって、印刷で伝承されたものである。現在までに発見されている最古の印刷は1530年頃のもので、最新の印刷は1642年のものである[1]。その成立はもちろん最古の印刷よりもずっと以前のものであると推定されるが、一体この韻文『不死身のザイフリート』の起源はいつの時代にまで遡るのであろうか。それが遅くとも十五世紀以前に存在していたことを推定させる一つの資料として挙げられるのが『ニーベルンゲンの歌』写本mである。本稿の目的は、この『ニーベルンゲンの歌』写本mと韻文『不死身のザイフリート』との相互関係を考察することによって、両者がともにニーベルンゲン伝説の中にあって特異な位置を占める作品であることを確証することである。

I.『ニーベルンゲンの歌』写本m ——内容目録——

まず『ニーベルンゲンの歌』写本mは1853年にダルムシュタットの大公公文書保管所で発見された羊皮紙本の一枚の断片（フォリオ判 285-290×210mm)である[2]。このいわゆる「ダルムシュタット断片」(das Darmstädter Bruchstück)[3] は、マインツ修道院の公文書保管所に由来する1540年の「アッカァブーフ」(Ackerbuch)のカバーとして使われていた[4] ものであるが、書写されたのは恐らく十五世紀の初めで、中部ライン河畔あるいは中部ライン地方においてであったろうと推定されている[5]。その内容は、以下に続いていたであろうと思われる『ニーベルンゲンの歌』の二十八歌章の内容目録とも言うべきものであり、従って、研究においては頻繁に「ダルムシュタット歌章目録」(das

---

1) Vgl. Werner HOFFMANN: Mittelhochdeutsche Heldendichtung. Erich Schmidt Verlag Berlin 1974. S.96.
2) Vgl.K. WEIGAND: Zu den Nibelungen. Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 10,1856. S.142.
Und vgl. auch Michael S. BATTS: Das Nibelungenlied. Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1971. S.810.
3) Vgl. Friedrich PANZER: Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt. W. Kohlhammer Stuttgart und Köln 1955. S.67.
4) Vgl. KROGMANN/PRETZEL: Bibliographie zum Nibelungenlied und zur Klage. 4. Auflage. Erich Schmidt Verlag Berlin 1966. S.21.
5) Vgl. K. WEIGAND: a.a.O.,S.142.

Darmstädter Aventiurenverzeichnis)[6] などとも呼ばれている。しかし、その歌章目録は、詳細に検討してみると、これまでよく知られてきた『ニーベルンゲンの歌』の伝承とは若干逸脱しているところがある。その逸脱部分が実は『不死身のザイフリート』の内容に一致するのであり、その点でこの『ニーベルンゲンの歌』写本mは貴重な資料の一つなのである。わが国ではまだほとんど紹介されていないし、また得難い貴重な資料でもあるので、ここでその二十八歌章の目録すべてを紹介しておくことにしょう[7]。

1. Abinture wie siferit wusch zu stride vnd wie er hurnyn wart
vnd der nebůlunge hurt gewan E er ritter wart ij
ジーフェリートが成長したのち戦い、角質の皮膚となり、
ネービュルンゲの財宝をも獲得して、騎士となったこと。 (2)

2. Abinture wie siferit reit vz sinez vater lande mit zwolf
kunē reckin vnd wie er kam zu gunter vnd sinē hildē jx
ジーフェリートが十二人の勇敢な勇士を伴って父の国を出て、
グンテルとその勇士らのところに到着したこと。 (9)

3. Abinture wie hagin sach siferidē zum erstē
vnd sagete syme h're von siner groſzin ebinture xj
ハーギンがジーフェリーデを初めて見て、
その偉大な冒険について主君に語ったこと。 (11)

4. Abinture wie siferit ludegast vnd sinē brudir
hirtzogin ludegere gein wormez brachte gefangin xjx
ジーフェリートがルーデガストとその弟領主ルーデゲーレを
捕らえてウォルメスに連れて来たこと。 (19)

5. Abinture wie siferit kriemyldē zum erstē wart sehin
vnd sie sich in h'tzin liep gewonnē xxiij
ジーフェリートがクリーミルデに初めて出会い、
心の中で彼女を恋慕ったこと。 (23)

---

6) Vgl. Werner HOFFMANN: a.a.O.,S.103.

7) 引用は K. WEIGAND: Zu den Nibelungen. ZfdA.10,1856.に拠る。なお、邦訳は拙訳である。

6. Abinture wie gunter noch kriemilde farin wolde
vnd wie sie hindert ein wildir drache xxvij
グンテルがクリーミルデのところへ行こうと思ったが、
一匹の荒々しい竜がそれ（一行の旅立ち）を阻んだこと。 (27)

7. Abinture wie kriemilde nam ein wildir drache
vnd furte sie vff einē hohin stein xxxj
一匹の荒々しい竜がクリーミルデを奪い、
彼女を高い岩山へ連れ去ったこと。 (31)

8. Abinture wie siferit die juncfrauwe vō dem
drachin steine gewan mit manchyr groſzin arbeit jxxxx
ジーフェリートがその乙女を竜の岩山から
救出するのに並々ならぬ大きな苦労をしたこと。 (39)

9. Abinture daz siferit dē drachin hatte vbir wondin
vnd fur mit siner juncfrauwe an dem rin xxxxiiij
ジーフェリートが竜を打ち倒して、
乙女を連れてライン河畔へ帰ったこと。 (44)

10. Abinture wie siferit reit von isinstein gen
nebulunge lant vnd holte siner manne dusint lij
ジーフェリートがイージンシュタインから
ネーブルンゲの国へ赴き、彼の家来千人を連れて来たこと。(52)

11. Abinture wie gunter siferidē gein burgundin ridē
vnd sinē frundē kunt dede daz er vnd kriemelt
quemen lvj
グンテルがジーフェリーデをブルグントの国へ行かせ、
一族の者たちに、自分とクリーメルトがそちらに
向かっていることを知らせたこと。 (56)

12. Abinture wie gunter vnd kremhilt gein
wormez kamē vnd wie sie in phangē wordē ljx
グンテルとクレームヒルトがウォルメスに到着し、
出迎えられたこと。 (59)

13. Abinture wie gunter vnd siferit zum erstē
zu bette gingin vnd wie iz dē h'rē beide ir ging lxij
グンテルとジーフェリートが初夜の床につき、
両者の殿御がいかなる夜を過ごしたかということ。 (62)

14. Abinture wie siferit vnd sine frauwe schiedē
vnd kamē in sin vat' lant lxvij
ジーフェリートとその妻が別れを告げて、
父の国へ帰って行ったこと。 (67)

15. Abinture wie der bose fint rit daz brunhilt
kriemildē vnd siferidē begunde haſzinde lxjx
仲の悪い敵が帰国したのち、ブルンヒルトが
クリーミルデとジーフェリーデを憎み始めたこと。 (69)

16. Abinture wie gunter vnd brunhilt santen
zu kriemhilde vnd zu siferide lxxj
グンテルとブルンヒルトがクリームヒルデと
ジーフェリーデのところに使者を送ったこと。 (71)

17. Abinture wie siferit vnd kriemhilt gein
wormez quam̄ in gantzin truwē lxxiiij
ジーフェリートとクリームヒルトが
誠実な心を抱いてウォルメスへやって来たこと。 (74)

18. Abinture wie sich die zwo konigin schuldē
vnd bruwē eynē groſzin mort lxxvij
二人の王妃が口論し、
ひどい暗殺の原因をつくったこと。 (77)

19. Abinture wie gunter vnd hagin siferidē boschlich vir riedin
vnd wie sie en hindir gingē in groſzin vntruwē lxxxj
グンテルとハーギンがジーフェリーデのことで
悪企みを立て、不実にも彼の背後に近づいたこと。 (81)

20. Abinture wie siferit mortlich ir slagin wart
von hagin lxxxiiij
ジーフェリートがハーギンによって
暗殺されたこと。 (84)

21. Abinture wie kriemilt clagete irs mannez dot
vnd wie er be stadit wart zu der erdē lxjxxx
クリーミルトが彼女の夫の死を嘆き、
夫は大地に埋葬されたこと。 (89)

22. Abinture wie segemūt so trureclich wedir heim reit
an sinē son vnd kriemelt bleip zu burgundin lxxxxiij
ゼーゲムートは悲しく息子の子供のもとに帰国したが、
クリーメルトはブルグント国にとどまったこと。 (93)

23. Abintüre wie konige etzel warp vm kriemylt
vnd wie rudigir kam zu burgundin lxxxxviij
エッツェル王がクリーミルトに求婚し、
ルーディギルがブルグント国にやって来たこと。 (98)

24. Abinture wie schone rudigern flehete frauwe kriemilde
E daz sie lobin konig etzeln zu manne Ciij
ルーディゲルンがクリーミルデ未亡人に嘆願し、
彼女がエッツェル王のところに赴くことを誓ったこと。 (103)

25. Abinture wie kriemilt zu bettelare kam
vnd wie sie in phangin wart Cvj
クリーミルトがベッテラーレに到着し、
出迎えられたこと。 (106)

26. Abinture wie etzel reit gein kriemilde vnd
wie er sie in phing in sime lande Cjx
エッツェルがクリーミルデを迎えに行き、
彼女を自分の国で出迎えたこと。 (109)

27. Abinture wie daz kriemelt warp daz ir brudir kam
zün hunē also det brunhilt vor daz siferit kam
zün burgundin Cxij
かつてブルンヒルトがジーフェリートに
ブルグント国訪問を要請したように、
クリーメルトは兄弟がフン国に来るよう頼んだこと。 (112)

28. Abinture wie etzel swamel vnd felbel zu dem rine sante
noch syme swagir daz er queme zu der hochzit Cxiiij
エッツェルは、義兄が結婚式に来るよう、スワーメルとフェルベルを使者としてライン河畔の義兄のところへ遣わせたこと。(114)

以上が『ニーベルンゲンの歌』写本mの歌章目録である。それぞれの歌章目録の末尾にローマ数字で表わされているのは頁数である。なお、第1詩節における下線部 wusch は wuchs（成長した）の書き間違いであろう[8]。また同様に第6詩節、第11詩節及び第12詩節における下線部は、いずれもブルンヒルト(Brunhilt)の書き間違いであると推定されるが、これについてはあとで述べる。

II.『ニーベルンゲンの歌』写本mの特徴 ——写本Bとの比較において——

以上の『ニーベルンゲンの歌』写本mの歌章目録を『ニーベルンゲンの歌』写本B[9] ——最も原典に近いと言われている——と比較して、まず気づくのは登場人物の表示の相違であろう。写本mの歌章目録に記載されているすべての登場人物について、現代ドイツ語による一般的表示を添えて一覧表にまとめてみると、次の通りである。

写本B	写本m	一般的表示
ジーフリト (Sîfrit, Sîvrit)	ジーフェリート (Siferit) またはジーフェリーデ (Siferide)	ジークフリート (Siegfried)

8) Vgl. Friedrich PANZER: Studien zur germanischen Sagengeschichte. II. Sigfrid. C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung München 1912. (Neudruck: Sändig Reprint Verlag Vaduz/Liechtenstein) S.29.

9) 『ニーベルンゲンの歌』写本Bはもともと章分けをされていたわけではないが、テクスト刊行は全体を39歌章に分けて、さらに1－19歌章を前編、20－39歌章を後編とするのが慣例となっている。本稿でもその慣例に従って記述し、『ニーベルンゲンの歌』のテクストにはデ・ボァ (Helmut de BOOR)のブロックハウス版（相良守峯訳岩波文庫）を用いる。

クリエムヒルト (Kriemhilt)	クリーミルデ (kriemilde, Kriemylde) またはクリーミルト (Kriemilt, Kriemylt) あるいはクリーメルト (Kriemelt)など	クリームヒルト (Kriemhild)
プリュンヒルト (Prünhilt)	ブルンヒルト (Brunhilt)	ブリュンヒルト (Brünhild)
グンテル (Gunther)	グンテル (Gunter)	グンター (Gunther)
ハゲネ (Hagene)	ハーギン (Hagin)	ハーゲン (Hagen)
リウデガスト (Liudegast)	ルーデガスト (Ludegast)	リューデガスト (Lüdegast)
リウデゲール (Liudegêr)	ルーデゲーレ (Ludegere)	リューデガー (Lüdeger)
ジゲムント (Sigemunt)	ゼーゲムート (Segemut)	ジークムント (Siegmund)
エッツェル (Etzel)	エッツェル (Etzel)	エッツェル (Etzel)
リュエデゲール (Rüedegêr)	ルーディギル (Rudigir) またはルーディゲルン (Rudigern)	リューディガー (Rüdiger)

スウェンメリーン (Swemmelîn)	スワーメル (Swamel)	シュヴェンメリーン (Schwemmelin)
ウェルベル (Wärbel)	フェルベル (Felbel)	ヴェルベル (Werbel)

写本Bの主人公ジーフリト(Sîfrit, Sîvrit)の表示が写本mでは正確にジーフェリート(Siferit)あるいはジーフェリーデ(Siferide)で統一されているのに対して、写本Bのもう一人の主人公クリエムヒルト(Kriemhilt)の表示は写本mでは一定していないことが特に目立っている。一覧表に示したクリーミルデ(Kriemilde, Kriemylde)またはクリーミルト(Kriemilt, Kriemylt)あるいはクリーメルト(Kriemelt)のほかに、クレームヒルト(Kremhilt)、クリームヒルデ(Kriemhilde)そしてクリームヒルト(Kriemhilt) の名称で呼ばれているが、もちろん同一人物であることは明らかである。ただし、第6歌章のクリーミルデ(Kriemilde)、第11歌章のクリーメルト(Kriemelt)及び第12歌章のクレームヒルト(Kremhilt)は、いずれもブルンヒルト(Brunhilt)となるべきであることは、『ニーベルンゲンの歌』写本Bなどとの関連からも容易に推定される。恐らく書写する際にうっかり書き間違えたのであろう。写本mの歌章目録を最初にテクスト化したK.ヴァイガントはすでにそのことを指摘している[10]。また第23歌章のルーディギル(Rudigir)と第24歌章のルーディゲルン(Rudigern)についても、両者は同一人物であるべきであり、いずれも写本Bにおけるリュエデゲール(Rüedegêr)であることは言うまでもない。このように写本mにおける登場人物の表示には徹底性が欠けているきらいがあるが、しかし、これらの欠陥はここではそれほど問題ではない。上で指摘した綴りの書き間違い並びにクリームヒルトとブルンヒルトの書き間違いなどと同じように、このようなことは古文学においては頻繁に起こりうることだからである。むしろ写本mは大筋において写本Bを代表とする『ニーベルンゲンの歌』の物語と内容が一致していることに注意を払うべきであろう。

ところが、その全体の内容に注目してみると、写本mは写本Bと異なっている箇所があることはすでに述べた通りである。特に写本mの第1歌章及び第6－9歌章に語られている物語内容に注目していただきたい。写本mの第1歌

10) Vgl. K. WEIGAND: a.a.O.,S.143.

章に語られているジーフェリートの皮膚の角質化とネービュルンゲの財宝獲得については、なるほど写本Bにおいてものちにハゲネの語りという形式（第3歌章86-101詩節）で語られている[11]が、しかし、写本mの第6歌章の後半から第9歌章にかけて語られているクリーミルデの誘拐とそれに伴うジーフェリートの救出行為については写本Bにおいては見出されえないものである。否、それどころか、これらの冒険は北欧のニーベルンゲン伝承においても見出されえないのであり、この点で写本mはニーベルンゲン伝承の中にあって特異な位置を占める貴重な作品であると言えよう。

III.『ニーベルンゲンの歌』写本mと『不死身のザイフリート』

『ニーベルンゲンの歌』写本mにおけるこの逸脱部分の内容がかなり正確に推定されるのが、すなわち、十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』[12]によってである。この作品は言語・形式的には統一されているものの、内容的には締まりのない編集を示しており、作品全体は冒頭部分（1－15詩節）、主要部分（16－172詩節）そして結末部分（173－179詩節）の三つに区分されるのが一般的である[13]。写本mの第6歌章から第9歌章の物語内容はこの『不死身のザイフリート』の主要部分（16－172詩節）から補われうるのである。この韻文作品の主要部分を参考にしながら、写本mにおける第6－9歌章の物語内容を再構成してみよう。

まずグンテル王は、写本Bにおいてと同じように、写本mでも第6歌章において女王ブルンヒルト（ただし、テクストでは書き間違いからクリーミルデとなっている）の支配するイージンシュタインへ出かけようとするが、一匹の荒々しい竜がその旅立ちを中断させる格好となっている。なぜなら、写本m第7歌章目録に記載されている通り、一匹の荒々しい竜がクリーミルデを奪い、彼女を高い岩山へ連れ去ったからである。グンテル王はイージンシュタインへ旅立

---

11) もっとも写本mでは、その歌章目録の記載から容易に推定されるように、第1歌章でのジーフェリートの冒険譚がのちに第3歌章でもハーギンの語りという形式で再度繰り返されることになっている。

12) テクストにはPaul PIPER (Bearbeitet): Die Nibelungen. Erster Teil. Hürnen Seyfrid. (In: Deutsche National-Litteratur von Joseph KÜRSCHNER. 6. Band. Union Deutsche Verlagsgesellschaft Stuttgart, Neudruck Sanshusha Tokyo 1973.）を用い、詩節番号もそれに従う。

13) Vgl. Volker-Jeske KREYTHER: Der Hürnen Seyfrid. Die Deutung der Siegfriedgestalt im Spätmittelalter. Verlag Peter Lang Frankfurt am Main 1986. S.19.

つ前にまずその妹クリーミルデを救い出さねばならないのである。そのクリーミルデ救出に援助の手を差しのべたのがジーフェリートである。彼は写本Bにおいてと同様に、デンマルク勢とザクセン勢に対する戦闘で手柄を立てる（写本m第4歌章）ことによって初めてクリーミルデに出会うことがかなって以来、心の中で彼女を恋慕っていた（写本m第5歌章）のである。その愛しい姫が恐ろしい竜に連れ去られたのであるから、ジーフェリートがじっとしていられないのは当然のことであろう。『不死身のザイフリート』34－36詩節ではザイフリートが森の中でその竜の足跡を見つけたのは偶然の出来事として語られているが、この写本mではジーフェリートが自ら進んで乙女クリーミルデを探しに出かけたことが推定される。ともかくもジーフェリートは深い森の中で竜の足跡を発見し、やがて竜と戦って苦戦の末に乙女を救い出すことになるのであるが、しかし、その前に『不死身のザイフリート』ではさまざまなエピソードが挿入されている。

ザイフリートは、すなわち、森の中でまず最初に侏儒王オイゲルに出会い、その侏儒王からさまざまな知識を得たあと、その森に君臨する巨人クペラーンと戦わねばならない。竜の岩山へ通ずる道の鍵をその巨人が持っているからである。ザイフリートは苦戦の末に巨人クペラーンを打ち負かすが、乙女救出の援助を条件に巨人を生かしておく。ところが、ザイフリートがその巨人の案内で岩壁の扉を調べていると、背後から不実な巨人が飛びかかってザイフリートに傷を負わせる。そのとき霧の頭巾（隠れ頭巾）を被せてザイフリートを助けたのが侏儒王オイゲルである。誠実な侏儒王の援助で窮地を脱したザイフリートは、再度巨人を打ち負かし、巨人に道案内をさせて、やっと竜の岩山に辿り着く。ザイフリートは乙女クリーミルデと再会し、彼女のために恐ろしい竜と戦う固い決意を示すと、その大きな労苦に対して彼女から「真心」の誓いを受け取る。竜と戦うためにザイフリートは、岩壁のところに隠されていた剣をつかもうとするや否や、三度巨人がザイフリートを襲い、両者の間で三度格闘が始まる。激しい戦いの末、ザイフリートは三度巨人を打ち負かし、巨人は三度命乞いをする。しかし、今や乙女との再会を果たしたザイフリートは、この巨人の度重なる不実な行為を許すことはできずに、ついにその巨人を岩から投げ落として殺してしまうのである。

竜との戦いの前に『不死身のザイフリート』では上記のような巨人クペラーンとの三度にも及ぶ戦いが展開されるのであるが、しかし、『ニーベルンゲンの歌』写本mにおいてこの侏儒王オイゲルと巨人クペラーンが登場するか否かは、その歌章目録からだけでははっきりと判断することはできない。またその巨人

クペラーンに打ち勝ったあとに繰り広げられる竜との戦いの際に、『不死身のザイフリート』においてのように、竜が六十匹の子竜を連れていたのかどうか。さらに竜の吐き出す火炎を避けて洞穴に逃げ込んだ際に、英雄がその洞穴の中で『不死身のザイフリート』のように財宝を偶然発見したのか否か。これらの細かな点についても写本mの歌章目録だけからは決定されえない。いずれにしてもジーフェリートがその乙女を竜の岩山から救出するのに並々ならぬ大きな苦労をしたことだけは、写本m第8歌章目録から明白である。恐らくこの竜との戦いを通じてジーフェリートと乙女クリーミルデとの間には誠実な愛が芽生えてきたのであろう。その戦いが苦難を強いるものであればあるほど、それだけ一層二人の間の愛は深化してゆくことになっていると言ってもよいであろう。こうして竜退治のあと、二人は互いに危険から免れたことを喜び合い、誠実な愛を誓い合って、ライン河畔のウォルメスへと帰って行くのである。

以上のような内容の物語が写本mの第6－9歌章において語られていたものと推定される。ところが、『不死身のザイフリート』ではザイフリートとクリームヒルトはライン河畔のウォルムスに到着するや否や、大歓迎を受けて結婚式を挙げるのに対して、写本mではその結婚のためにはジーフェリートはもう一つの冒険を克服しなければならない。竜の乙女誘拐によって中断されていたイージンシュタインへの旅――『不死身のザイフリート』では語られていない――がそれである。従って、写本mではジーフェリートは姫クリーミルデと結婚するためには二つの冒険、すなわち、竜からの乙女解放とイージンシュタインへの旅を克服しなければならない。両者はいずれも危険を伴う冒険であることは言うまでもない。それだけにジーフェリートとクリーミルデとの愛は深化され、物語構造も重層的となっているのであるが、まさにそれゆえに書写の際に書き手はうっかりブルンヒルトとなるべきところをクリーミルデにして書き間違えたのであろうか。それはともかくも、写本mには『不死身のザイフリート』に語られているような乙女救出の冒険と同時に、『ニーベルンゲンの歌』写本Bにおいて語られているようなグンテル王のイージンシュタインへの冒険の旅をも含んでいることが、以上の考察から明らかである。

従って、ここで問題となってくるのは、この乙女救出の冒険が写本mの中に織り込まれることによって、従来の『ニーベルンゲンの歌』の物語展開にどのような影響が生じてきたのかということである。この問題については、写本mの前後の歌章目録から推論する以外に方法はないが、二十八歌章の全体を眺めて推測するに、その乙女救出の前後の筋立てに若干の差異は生じてくるにせよ、大筋においてはそれほど逸脱する物語の展開はなかったのではあるまいか。す

なわち、ブルンヒルトは、写本Bにおいてのように、グンテル王の家来としてイージンシュタインに乗り込んだジーフェリートの策略に対して何らかの疑念を抱くに至り、二組の婚姻が成立してジーフェリート夫妻が故国に帰ったあと、彼女は一向に伺候もしないクリーミルデとジーフェリートを憎み始めたのであり、その憎しみがジーフェリート夫妻招待の際の口論によってさらに深くなって、ついにはハーギンによるジーフェリート暗殺へとつながってゆくのである。写本mの第6－9歌章の前後との関連から判断して、第5歌章ないし第6歌章前半はそのまま第10歌章に続きうるのである。従って、写本m第6歌章後半から第9歌章にかけての挿入部分は、ジーフェリートとクリーミルデとの間の愛を深化させるために、そのまま挿入されたに過ぎない性質のもので、前後の物語構造に大きな影響を及ぼす類いの挿入ではなかったと言ってよいであろう。写本mの第1歌章におけるジーフェリートの角質化とネービュルンゲの財宝獲得に関しても同様であり、『不死身のザイフリート』の冒頭部分(1－15詩節)[14]などにおいて遺されているような英雄の冒険が単に取り入れられているだけであって、例えば、『ニーベルンゲンの歌』写本Bのように全体の整然たる構想のために古い素材の使用が制限されるというようなこともなかったのであろう[15]。従って、写本mにはジーフェリートの皮膚の角質化のエピソードもあれば、竜によるクリーミルデの誘拐とそれに伴うジーフェリートの乙女救出のエピソードも挿入されており、さらにはグンテル王のイージンシュタインへの冒険の旅も語られているなど、ありとあらゆる要素が含まれていることが明らかである。それだけに写本mは、写本Bのような整然とした作品ではなく、さまざまな伝承を単に寄せ集めた作品に過ぎないということは否めないかも知れない。しかし、まさにそれゆえにこそまた同時に貴重な資料であるとも言えるのである。

---

14) この冒頭部分の詳細については拙稿：『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質　徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）第4巻1993年，128-135頁を参照のこと。

15) 例えば、『ニーベルンゲンの歌』写本Bにおいて英雄ジーフリトの竜退治及び財宝獲得の冒険が叙事詩的な描写ではなく、第3歌章でのハゲネの語りという形式で取り入れられているのも、全体の整然たる構想のためである。それが完全には削除されなかったのは、のちの筋の展開になくてはならない要素の一つだからである。ちなみに、『ニーベルンゲンの歌』写本Bが整然たる構成を有する作品であることは拙書：『ニーベルンゲンの歌』――構成と内容――郁文堂1991年（特に第六～八章）を参照のこと。

おわりに

以上、『不死身のザイフリート』の主要部分（16－172詩節）を参考にして『ニーベルンゲンの歌』写本mの第6－9歌章の物語内容を再構成してみたが、この写本mの「ダルムシュタット歌章目録」によって明らかにされることは、『不死身のザイフリート』における主要部分を伝える何らかの物語素材が遅くとも十五世紀以前には存在していたということである。その素材がどのような形の文学作品であり、またそれがいつの時代にまで遡るものであったかについては、残念ながら決定されえない。ともかくも十五世紀以前に存在していた乙女救出の物語を、写本mの本来の改作者は第6－9歌章に取り入れたのであろう。それとともに他方では、この乙女救出の物語は徐々に韻文『不死身のザイフリート』へと結実していったのであろう。そしてこの韻文『不死身のザイフリート』における主人公の乙女救出の物語――決して北欧のニーベルンゲン伝承には見出されえない――は、十六世紀にはハンス・ザックス(Hans Sachs, 1494-1576)により『登場人物十七名の悲劇・不死身のゾイフリート』（1557年）[16] の中に織り込まれると同時に、やがて十七世紀と十八世紀には民衆本『不死身のジークフリート』[17] へと発展してゆくことにもなるのである。しかもこの民衆本はやがて十九世紀にはグスタフ・シュヴァープ(Gustav Schwab,1792-1850)によって翻案[18] されて、さらに多くの人々の間に普及してゆくのである。このようなニーベルンゲン伝説の系譜の中にあって、『ニーベルンゲンの歌』写本mと韻文『不死身のザイフリート』は英雄ジーフェリートあるいはザイフリートの乙女救出を語り伝える貴重な一つの伝承として特異な位置を占める作品であると言うことができるのである。

---

16) Bernhard ARNOLD (Hrsg.): Hans Sachs' Werke. Zweiter Teil. Ein Tragedj mit 17 Personen: Der huernen Sewfrid. In: Deutsche National-Litteratur von Joseph KÜRSCHNER. 21. Band. Union Deutsche Verlagsgesellschaft Stuttgart, Neudruck Sanshusha Tokyo 1973.

17) 櫻井春隆訳：不死身のジークフリートのいとも麗しき物語（ドイツ民衆本の世界 II『ラーレ人物語　不死身のジークフリート』国書刊行会1987年所収）なお、この民衆本は1657年にハンブルクにおいて印刷されたものが最古のものとして知られているが、残念ながらこれは現存していない。現存する最古の印刷本は1726年のものである。（同上書解説 312頁参照）

18) グスタフ・シュヴァープ（國松孝二訳）：『甲羅武者ジークフリート』（岩波文庫『ドイツ民譚集 1』岩波書店1948年所収）